

# 北朝における郡望の性格(上)

矢野主税

## 目次

### 序

#### 第一節 北朝正史にみえる出身地

### 序

私は嘗て江南における門閥社会の動揺について考え、あくまで郡望に固執する人々と、むしろ郡望に否定的な人々があったことを指摘し、南朝においては歴史の流れは郡望否定の方向にむかいつつあったことを述べた〔郡望と土断〕（『史学研究』百十三号）。

ついで、「隋唐時代の上層郷邑社会Ⅰ・Ⅱ」（『第一經大論叢』713）（『4合併号及び814号』）において、隋唐時代の墓誌銘などから推定してみると、昔の有力な門閥達の子孫が、隋唐時代は地方官僚となつて全国的規模で移住し、その移住先に移貫し、それと共に彼等の本来の郡望にとらわれることなく、現住地によつてその出身を表現するような変化が起つたことを論じた。

勿論、竹田龍児氏によれば、「唐代の碑誌類では郡望の使用が圧倒的であり、それに対して旧唐書では旧望と新望とが

ちゃんぽんに用いられており、唐書においては新望は固より、旧望もすべて当時の州県名に改められている」〔唐代士人の「史学」〕<sup>24-4</sup>といわれ、つづけて、「郡望の使用が遽かに衰えたのは世族の社会的地位の没落と密接に関係している。安史の乱後の社会は軍閥の跋扈に悩み、打続く騒乱に世相は急激の変貌を示し、旧きものは亡んで新しき時代のまさに到来せんとする胎動が感ぜられつつあった。」（同上）とされ、唐代安史の乱を境として、世族の没落と共に郡望の使用も衰えたと指摘される。

けれども、私の見るところでは、碑誌類と雖も必ずしも常に郡望を使用しているわけではなく、すでに隋代に於いて、郡望をば旧望として捨て去り、現住地の新望を以てその出身地として用いているものも多いのである。

では、このような出身地の表現における傾向は、北朝においてはどうかであつたろうか。私は南朝においては郡望否定の傾向はかなりはつきりしたものがあつたことを指摘したが、隋唐時代は南朝よりも寧ろ北朝の政治、社会全般に亘つての傾向を引きついでいると考えうるとすれば、北朝に於いてもまた、郡望否定の傾向が全くなかつたとはいえないであらう。

### 第一節 北朝正史にみえる出身地

はじめに、北朝正史の各列伝にみえる人々の出身地がどのように表現されているか、換言すれば、（Ⅰ）郡望を固執する形をとるのか、それとも郡望を全く無視して、（Ⅱ）現住所・現本貫（新望）のみをとるか、或は、（Ⅲ）それらの中間ともみられる表現をしているのか、について検討してみたい。

#### （Ⅰ）郡望のみの場合

このような例は、勿論一般にみられるところである。例えば、崔玄伯伝（魏書24）には、「清河東武城人也」とみえ、長孫嵩伝（魏書25）には、「代人也」とみえ、穆崇伝（魏書27）にも、「代人也」とあり、高湖伝（魏書32）には、「渤海裔人也」

とみえ、刁雍伝（魏書38）には、「渤海饒安人也」とみえ、李順伝（魏書39）には、「隴西狄道人也」などとみえている。このような例は、北齊書、周書、隋書などにも共通して数多く見受けられる。煩をさせて一々例示しない。

## （Ⅱ）現本貫のみの場合

ところが一方では、旧来の望を称せず、現本貫即ち新望のみを表示している場合も極めて多い。例えば、魏朝の孝文帝に從つて平城から南遷して洛陽におちついた人々の場合、「代人」から「河南人」への出身地表示の変化がみられる。魏書（7下）高祖孝文帝紀の、太和十九年六月丙辰の条によれば、

「詔遷洛之民、死葬河南。不得還北。於是代人南遷者。悉為河南洛陽人。」

とみえるが、この詔にみるが如く、遷都につき從つて南下した代人達は、皆「河南洛陽人」を称することとなった。この詔がこの通り実施されたことは、前述長孫嵩の子孫である長孫儉が、「河南洛陽人也」（周書26）と称し、長孫嵩と同族の子孫である長孫紹遠も「河南洛陽人也」（同上）と称し、その紹遠の子覽も同様に、「河南洛陽人也」（隋書51）と称しているところで明らかである。或はまた、北齊書（26）薛琡伝にも、「河南人、其先代人」とみえ、北齊書（38）元文遙伝にも、「河南洛陽人。魏昭成皇帝六世孫也」などとみえている。即ち、北齊、周、隋の各時代において、代人から河南人への変化がみられる。

しかしながら、太和十九年の詔によって、「河南洛陽人」たるべしと令せられた以上、北魏時代においても、既に本貫を洛陽にうつして、「河南洛陽人」と称したに相違なく、例えば、奚康生伝（魏書73）には、「河南洛陽人、其先代人也」とあり、山偉伝（同上）にも、「河南洛陽人也、其先代人」とみえ、侯剛伝（魏書93）にも、「河南洛陽人、其先代人也」などとみえているのはそれを証するものであろう。

このようにみると、少くとも洛陽に移住した北方系の人々の子孫は、皆「河南洛陽人」と称していたと考えてよい

であろう。

例えば、先述した長孫氏の一門について、その出自表現についての表をつくってみると、

出典	出自表現
長孫嵩伝（魏書25）	代人也
長孫道生伝（同右）	嵩從子也
長孫慮伝（同書86）	代人也
長孫儉伝（周書26）	河南洛陽人也
長孫紹遠伝（同右）	河南洛陽人
長孫平伝（隋書46）	河南洛陽人也
長孫覽伝（隋書51）	河南雒陽人也

とみえ、更に旧唐書（65）長孫無忌伝をみると、「河南洛陽人、其先出自後魏獻文帝第三兄」とあることからみて、この一門は北魏末以降、完全に「河南洛陽人」という新望を称していたのである。

或はまた、同じく代人であった于氏一門についてみるに、

出典	出自表現
于栗磾伝（魏書31）	代人也…子、洛拔
于勁伝（同書83下）	太尉拔之子
于簡伝（同書87）	代人也
于提伝（同右）	代人也
于洛侯伝（同書89）	代人也
于謹伝（周書15）	河南洛陽人也

于翼伝（同書30）  
于義伝（隋書39）  
于仲文伝（同書60）

太師燕公謹之子  
河南雒陽人也  
建平公義之兄子

という。すると、ここでも魏末以降は専ら「河南洛陽人」を称していたとみてよからう。

しかし、以上にみた「代人」から「河南人」へという例証は、漢民族の所謂門閥社会の中に生きてきた家々についてのものではないから、代人という、いわば特殊社会に属する場合ではないのか、という批判がありうる。そこで、漢民族であつて、門閥社会に属していた人々についてはどうであつたのか、について考えてみよう。

#### (1) 房氏の場合

魏書（43）房法寿伝によれば、「清河繹幕人也」とみえるのみであるから、宛もこれは房氏本来の郡望であるかの如くであるが、法寿の族子景伯の伝によると、「高祖謚避地渡河。居於齊州之東清河繹幕焉。祖元慶仕劉駿歷七郡太守。」（同上房法寿伝）とみえている。このことに関連して、北史（39）房法寿伝をみるに、

「房法寿……清河東武城人也。曾祖謚仕燕位太尉掾。隨慕容氏遷于齊。子孫因家之。遂為東清河繹幕人焉。」

と記している。すると房氏は元來は清河東武城の人であつたが、法寿の曾祖の時に移住し南遷して東清河繹幕人となつたことになる。いま隋書（66）房彥謙伝をみるに、

「本清河人也。七世祖謚仕燕太尉掾。隨慕容氏遷于齊。子孫因家焉。」

とみえているのは、彥謙は以前は清河（東武城）の人であつたが、今はそうではないことを示しているわけで、北史同様に彼が郡望（旧望）をすてて現本貫地（新望）へうつたことを示しているといえる。従つて、房法寿伝の「清河繹幕人」というのは、所謂郡望（旧望）ではなく、現住地であるわけである。

いま、金石萃編(43)房彦謙碑をみると、

「彦謙字孝冲、清河人也。七世祖諡燕太尉掾。□慕容氏。□度寓於齊土。宋元嘉中、以□郡之西部、置東冀州東清□□  
繹幕縣。仍為郡縣人。」

とみえる。すなわち、元來清河東武城の人であつた房氏が、諡の移住以降において、その地におちついて清河繹幕人となつたが、この地が劉宋の勢力範圍に入るに及んで、東清河繹幕人と称していたことが知られる。

(2) 崔氏の場合

魏書(67)崔光伝によると、

「崔光……東清河鄆人也。祖曠從慕容德、南渡河。居青州之時水。慕容氏滅、仕劉義隆為樂陵太守。」

とみえる。ところが、北齊書(42)崔劼伝によると、

「本清河人。曾祖曠南度河居青州之東。時宋氏於河南立冀州、置郡縣。即為東清河郡人。南縣分易。更為南平原貝丘人也。世為三齊大族。」

といっているが、北史(44)崔光伝には、

「崔光清河人。……祖曠從慕容德、南度河。居青州之時水。慕容氏滅。仕宋為樂陵太守。於河南立冀州、置郡縣。即東清河鄆人。縣分易更為南平原貝丘人也。」

とみえていて、魏書、北齊書の記事を適宜につないで記している。

これによれば、崔光の家は元來清河崔氏に属するが、曠以降南遷し、一旦東清河鄆人となり、更に南平原貝丘人と称するようになった、ということになる。すると、「清河」こそ本来の郡望であり、それに対して、「東清河」というのは新し

い居住地であり、新しい本貫即ち新望であったわけである。ただ、「南平原貝丘」というのは、居住地の変更ではなくて、行政区劃名の変更にすぎなかったのであろう。何れにしても、魏書崔光伝にみえる出身地は所謂郡望ではなくて、現住地、新本貫地を示していることは間違いない。

(3) 賈氏の場合

魏書(72)賈思伯伝によると、「斉郡益都人也」とみえているが、この賈氏一門は、元来は武威を郡望とする一族であったわけで、例えば、金石萃編(28)賈思伯碑によれば、

「君諱思伯、字士休、武威姑臧人也。」

とみえ、又魏書(72)曹世表伝によると、

「世表……後転司徒記室。與武威賈思伯、茫陽盧同、龍西辛雄等並相友善。」

とみえ、何れも賈思伯の郡望は武威であるとしている。即ち、北史(47)賈思伯伝に、

「斉郡益都人也。其先自武威徙焉。」とみえる如く、武威の地から斉郡益都に移ったものである。

この賈氏というのは元来武威の名門で、魏志(10)賈詡伝によると、

「武威姑臧人也。……文帝即位。以詡為太尉。」

とみえ、同書同伝所引世語によれば、

「(詡)謨、惠帝時為散騎常侍、護軍將軍。<sup>(44)</sup>模子胤、胤弟龜、從弟疋、皆至大官。並顯於晋。」

とある如く、魏以来の門閥であり、晋書(60)賈疋伝によれば、

「武威人、魏太尉詡之曾孫也。……愍帝以疋為驃騎將軍雍州刺史。」

とみえて、西晋末まで名門の地位を保っていたようである。魏書(33)には、外に賈彝伝があつて、

「本武威姑臧人也。六世祖敷、魏幽州刺史広川都亭侯。子孫因家焉。」

とみえるが、これもまた武威賈氏一門に属していたのであろう。

このようにみてくると、賈思伯は郡望武威の地を離れて斉郡益都に移住し、ここを現住の地とし、現本貫としていたのであろうと思われる。

(4) 曹氏の場合

魏書(72)曹世表伝によれば、

「東魏郡魏人也。魏大司馬休九世孫、祖謨、父慶並有学名。」

とみえ、この曹氏は魏宗室に属する曹休(魏志曹休伝9)の子孫であるという。とすれば、曹操の出身地であるところの「沛国譙人」、或は晋以降の曹氏一門の「譙国誰人」(晋書50曹志伝、同書90曹〇伝)をこそ郡望として称すべきであつたであらう。例えば、曹世

表と同じく曹休の子孫である曹毗について、晋書(92)のその伝には、

「譙国人也。高祖休魏大司馬、父讖右軍將軍。毗少好文籍。」

とみえている。従つて、曹世表の場合は、恐らくはその新しい移住地に本貫(新望)が設けられ、それを以て出身地として現わしていたものと思われる。

(5) 竇氏の場合

魏書(88)竇瑗伝によれば、「遼西遼陽人」といつている。ところがその伝によると、漢大將軍竇武の曾孫崇の子孫で、



その崇が遼西太守となった為に、子孫はここに居住することとなった、といっている。そのことについて、

「自言、本扶風平陵人。……崇為遼西太守。子孫遂家焉。」(魏書88 寶瓌傳)

と述べているが、若し寶武の子孫であるならば、「扶風平陵人」(後漢書列傳59 寶武傳)と称するのが当然であつたろう。

例えば周書(30)寶熾伝によれば、

「扶風平陵人也。漢大鴻臚章十一世孫、章子統、靈帝時為雁門太守。避寶武之難。亡奔匈奴。」

といっているように、寶熾が事実寶章の子孫であるか否かは別としても、郡望としては「扶風平陵」を称していた。ところが寶瓌の場合はそうではなかったわけである。寶瓌と同様な例は、魏書(46)寶瑾伝にも見える。同伝によれば、

「頓丘衛國人也。自云漢司空融之後、高祖成為頓丘太守。因家焉。」

とある。融は章や武の祖先である(後漢書列傳13 寶武傳)。この場合も瓌の場合と同じく、「扶風平陵」を称しないで、移住地を出

身地としている。この両者は、事実寶武の子孫であつたとした場合、出身地として称されているのは、所謂郡望ではなくて、新しい移住地であり、新しい本貫であつたということになる。勿論、この二人の伝には、共に、「自言」と記してあるから、彼等が本当に寶氏一門に属していたか否かは疑わしいとしても、しかし、列伝にいうところが彼等の現住地であり、本貫地であつたことは間違いないであろう。

次に、西晋末以降江北から江南へ流寓していた所謂北人、或はその子孫で、後に江北に帰国した人達について考えてみよう。

まず、魏書(91)徐騫伝をみると、

「徐騫字成伯、丹陽人。家本東莞。與兄文伯等。皆善医藥。」

とみえる。すると、騫等は元來東莞の徐氏に属していたが、現実には江南の丹陽の人となっていたわけである。彼等兄弟

は既に丹陽に本貫をつけていたので、北帰しても丹陽の人と称していたのであろう。

次に、北齊書(33)徐之才伝をみるに、

「丹陽人也。父雄事南齊。位蘭陵太守。以医術為江左所称。……楊愔以、其南土之人不堪典秘書。」

とある。実はこの之才は徐騫の兄文伯の孫といわれ(周嘉猷撰「南北朝史表」)、これらの人々はすべて丹陽に居住していて、医術を以て有名であったのであろう。ところが、之才伝にみられるように、之才は北齊の人々から「南土之人」と呼ばれているわけ、この一門は、元来は江北の人であつたにしても、今や完全に江南の人となり、江南の望を以て称せられていたものにちがいない。

さて、ここで一つ疑問が残るのは、魏書徐騫伝で、「家本東莞」としていることである。江北の徐氏には、東海、東莞、高愛、燕国の各郡望があつた(拙著「魏晉百官世系表」参照)が、魏書は徐騫、之才一門を東莞の徐氏と見ているわけである。ところが、南史(32)張邵伝によると、

「東海徐文伯……濮陽太守熙曾孫也。」

とみえ、文伯は東海徐氏に属していたことになる。これは後述の如く、「徐之才墓誌」によると、東莞姑幕人というのが正しいのであろうが、しかし、何れであつたとしても、此一門が早くから江南に逃れ、江北における東莞、或は東海の郡望をふりすてて、完全に江南の人になり切っていたことは明らかであり、魏書、北齊書においても、新しい望である丹陽の人として記しているのであろう。

以上は魏書によって、郡望にとらわれず、現本貫(新望)を出身地として表示した例をみたが、このような例は北齊書にも多くの例——例えば、北齊書(24)杜弼伝、同書(25)徐遠伝、同書(34)鄭頤伝、同書(38)元文遙伝等——を見るのであるが、今は煩をさけて省略する。

ところが面白いことに、周書、隋書には、郡望をすてて現本貫を列伝に表示する例は、極めて稀である。ということは、郡望否定の傾向がなくなって、反対に郡望重視の傾向がたかまってきたのかというにそうでもない。実は、周書、隋書の出身地表現方法が魏書、北齊書とかなり異なっている故であって、郡望否定の傾向は寧ろ前代よりも著しいのではないかと思われる。では、周書、隋書にみえる出身地の記述はどういうものであったかというに、前述（Ⅰ）・（Ⅱ）の方法に対する（Ⅲ）の中間的表現方法であった。

### （Ⅲ）中間的表現

この方法は、郡望を表面に掲げることがあってもそれにこだわることなく、といって、現住地（現本貫）を代りに掲げるでもない方法である。この場合、中間的方法とはいっても、実質的には郡望否定の傾向を示すもので、既に魏書、北齊書にも用いられているが、周書、隋書に及んで極めて多く用いられているといえる。以下、魏書から隋書に及ぶそれらについて、時代に随って考えてみよう。それには大体三様の表現形式があった。

（A）第一のものは、郡望を列伝頭初に掲げながら、記述の中に現在の住所、現在の本貫はそこではない、という表現をとるもの、これは何れかと言えば郡望に執着した表現の如くみえながらも、最終的には郡望を否定するものである。

（B）第二のものは、「其先、某地（郡望）人也」とか、「本、某地（郡望）人也」という表現をとり、郡望を示しながらも、「其先」「本」によって、その地は現在の住所、本貫とは異なっていることを公然と示すもので、郡望否定の傾向の強いものである。

（C）第三のものは、「自云、某地（郡望）人也」というふうに、郡望の上に「自云」と記して、これは自称であって実際にその郡望に属する人か否かは明らかでない、という形で郡望を否定するものである。

注目すべきことは、このような郡望否定の傾向の記述は極めて多いということである。

(A) 先ず第一の形式について例をあげてみる。

(1) 魏書(33) 宋隱伝によると、

「西河介休人也。……父恭尚書、徐州刺史。慕容儁徙鄴。恭始家於廣平列人焉。隱性至孝。……尋以母喪歸列人。既葬被徵。固辭以疾。」

とみえる。これによれば、宋氏は恭の時から廣平郡列人縣に居住していたというが、恭の子隱の時母をこの列人に帰葬していることからみて、この地が宋氏の現住地であり新しい本貫(新望)となっていたことは間違いない(拙稿「東晋における社会的考察」〔史学〕。そのことは、宋隱伝に、  
雜誌「77—10」参照)。南北人对立問題—そ

「第三子温……卒。追贈建威將軍豫州刺史、列人定侯。」

とみえているように、温が列人侯を贈られていることから明らかである(「元和姓纂」序文、参照)。

(2) 魏書(38) 刁雍伝によると、

「渤海饒安人也。高祖攸、晋御史中丞。曾祖協定從司馬叡渡江。居于京口。位至尚書令。父暢司馬德宗右衛將軍。……及(劉)裕誅桓玄。以嫌故先誅刁氏。雍為暢故吏所匿。奔姚興豫州牧姚紹於洛陽。……姚泓滅。與司馬休之等歸国。

とみえている。するとこの刁氏は元來は渤海の刁氏で、雍は東晋元帝に仕えて重用された渤海饒安の刁協(晋書69)の子孫であつたのである。それから以降東晋末までこの一門は江南に居住していたので、丹徒縣京口里が一世紀近くの居住地であつたことは疑いなく(前掲「東晋における南」)、このような場合、一般に南朝人となつたと考えて間違いない(同上。拙稿「南人問題」〔長崎大学教育学部〕。朝における南北「社会科学論叢」19号)参照)。

このことは、前述した徐氏においても明らかであるが、徐之才と同様南人と目された例をあげてみると、例えば隋書

(78) 庾季才伝によると、

「新野人也。八世祖滔随晋元帝過江。官至散騎常侍。……因家于南郡江陵縣。祖詵梁處士。與宗人易齊名。父曼倩光祿卿。季才……江陵陷滅。……周太祖一見季才。深加優礼。……謂季才曰。卿是南人。未安北土。故有此賜者。欲絶卿南望之心。」

とみえており、この、元来新野庾氏に属するという庾季才に対して、周の太祖は、「卿是南人」といって、完全に南方人としての士人として遇している。このように、一般に北方の人々が、元来は北方系であるが、長らく江南に流寓した人々を南人として遇したのみではなく、それら江南に流寓した北方系の士人達も、自らを南人として認めていたことは、既に私が指摘している如くであった(同上)。

このように、江南に移住していた一族が、再び北帰した場合、表面的にはその一族の郡望が記述されながら、実は自他ともに南人として認めていたのであった。このような例は魏書(37)にみえる司馬氏一族、魏書(38)王慧龍、袁式、韓延之等の伝、魏志(71)裴叔業、夏侯道遷や、彼等と共に北帰した人々などの記事にみえる。

(3) 次に、魏書(45)杜銓伝をみるに、

「京兆人。晋征南將軍預五世孫也。……父巖慕容垂秘書監。仍僑居趙郡。……世祖……謂司徒崔浩曰。天下諸杜何處望高。浩對曰。京兆為美。……浩曰。中書博士杜銓其家今在趙郡。是杜預之後。今為諸杜之最。即可取之。……(杜)超謂銓曰。既是宗近。何緣復僑趙郡。乃延引同属魏郡焉。」

とある。これによれば、杜銓は杜預の子孫として、「京兆杜陵人」(杜預<sup>34</sup>傳)の郡望をもつと考えられていたのであろう。しかし、銓の父巖の代には、慕容氏に仕えて趙郡におり、その後銓になってからも、なお趙郡に居住していたことは明らかである。その杜銓が杜預の子孫として崔浩によって世祖に推挙されたのであるから、天下の諸杜の中の家格の高いものと

認められたのであろう。更に同宗と思われる杜超にすすめられて趙郡から超と同じ魏郡に本貫をうつしたもののようである。「属魏郡」というのは、本貫を魏郡につけたと解してよからう（拙稿「土断と白籍」  
（『史学雑誌』79—8））。

このように解してみると、この場合伝頭に京兆人といいながら、実際にはそこに本貫をつけていないということを明らかに示しているわけで、始めは趙郡に、ついで魏郡に本貫をうつしたものであろう。即ち、杜銓にとって魏郡は現住所、現本貫（新望）であり、趙郡は旧望、京兆は旧々望であることになる（拙稿「望の意義について」  
（『長崎大学教養学部「社会科学論叢」21号」参照））。

(4) 魏書(48) 高允伝によると、

「劉模者長樂信都人也。……正始元年復出為陳留太守。……遂家於南潁川。不復歸其旧郷矣。」

とみえている。長樂の人が南潁川に移住し、再び長樂に帰ることはなかったのであるから、劉模は完全に南潁川の人になつたわけであり、長樂信都は全くの旧郷（旧望）にすぎなかつたわけである。

(5) 魏書(77) 辛雄をみると、

「隴西狄道人。父暢……太和中本郡中正。雄……秦州大中正。雄從兄纂……太昌中、除左光祿大夫。纂僑寓洛陽。乃為河南邑中正。」

とある。雄が秦州大中正となつたのは、彼が秦州隴西郡の人であつたからであり、父暢が本郡中正となつたというのは、隴西郡中正であつたものであろう。何れも本貫のある地の中正となつたのである。ところが從兄纂は河南邑中正となつてゐる。これは纂が洛陽に本貫をうつしていたからと考える外はない。即ち、辛雄伝には、単に「僑寓洛陽」としかみえていなくても、ただ洛陽で一時生活していたということではなくて、そこに本貫をうつしてゐる故にこそ河南邑中正となつたとみるべきである。

以上のような例は極めて多いが、北魏の例は以上にとどめ、北齊書、周書、隋書から、夫々一、二の例を引用しておこ

う。

(6) 北齊書(18) 司馬子如伝をみるに、

「河内温人也。八世祖模、晋司空南陽王模世子保、晋乱出奔梁州。因家焉。魏平姑臧。徙居雲中。」

という。司馬子如の一家も元来は河内の司馬氏に属していたのであろうが、その祖先は一時梁州にうつり、そこに生活の根拠地を設けていたが、再び雲中に移住したという。ということは、この一門は郡望の地をとこの昔に離れて、梁州から雲中へと、次々に生活の根拠地――本貫をうつしていたと考えて誤りないであらう。

(7) 北齊書(42) 袁聿修伝によると、

「陳郡陽夏人。……天統中、詔與趙郡王叡等議定五礼。出除信州刺史。即其本郷也。時人榮之。」

と見える。これによれば、元来陳郡袁氏という名門に属した聿修が信州刺史になったことについて、「其本郷也」というのであるから、聿修はこの時信州に本貫をつけていたわけである。彼にとって、信州こそ現住地であり、現本貫(新望)であつたのである。

(8) 周書(29) 侯植伝にみえるところでは、

「上谷人也。……高祖恕魏北地太守。子孫因家于北地之三水。遂為州郡冠族。」

という。上谷の侯植の場合、実際には高祖恕の時から、既に上谷の人ではなく、北地三水の人になっていたわけである。しかも、遂に州郡の冠族となつたというのであるから、いうまでもなく北地三水の地が新しい望であり、ここを根拠地とする有力豪族となつたのであらう。

(9) 同じく周書(20) 閭慶伝をみると、

「河南河陰人也。曾祖善仕魏歷龍驤將軍、雲州鎮將。因家于雲州之盛樂郡。」

北朝における郡望の性格(上)

とみえる。これは河南河陰の郡望をもった閭慶一門が、善の代から雲州に居をうつし、そこを居住地とし、その地の人となったことを示すものであろう。

(10) 次に隋書についてみるに、沈光伝(64)によれば、

「吳興人也。父君道仕陳吏部侍郎。陳滅家于長安。」

という。この君道は、陳書(23)沈書沈君理伝にみえる君嚴、君理等とごく近い身内と推定して誤りあるまい。即ち、吳興沈氏に属する家であつたろうが、隋朝においては長安に居住し、吳興とは無縁の生活をしていたのであろう。

(11) 更に、隋書(40)虞慶則伝によるに、

「京兆櫟陽人也。……其先、仕於赫連氏。遂家靈武。代為北辺豪傑。」

とあるところによれば、郡望京兆の地を離れて靈武に本貫をつけ、この地の有力一族となつたことになる。「家某地」という表現はよく用いられる表現であるが、これはその地に根をおろして生活し、そこに本貫をうつしていることを意味すると考えてよいことは、この記事並に(前述)侯植伝によって明らかであらう。

(B) 次に第二の場合、即ち「其先」「本」という表現を郡望の上にかぶせ、元來先祖はその地に生活していたのであるが、今は別の地に根拠地をかまえていて、既に郡望の地とは現実的な関係はない。それは単に過去のことすぎないことを示す場合(前述拙稿「郡望」と土断参照)について考えてみたい。

このような積極的な郡望否定の表現は、非常に多く見出されるのではあるが、煩をさけて、魏書、北齊書、周書、隋書から適宜に引用してみたい。

a 「本」の用法の場合

(1) 魏書(37)司馬休之伝によると、



「本河内温人。晋宣帝弟譙王進之後也。司馬叡僭立江南。又以進子孫襲封。」

とみえる。休之の祖先は元帝と共に江南に移住したが、その子孫は恐らく一般の南渡の人と同様に、

「晋永嘉末。衣冠南渡。遂為金陵人。」（全唐文五三六、劉府君神道碑銘并序）

といわれるような金陵人に代表される江南の人となったと考えられる。例えば、休之と同伝の司馬楚之伝によると、「送父葬、還丹陽」とみえるが、これは江南司馬氏一族の墓地が丹陽に設けられていたことを示すことによっても推定される。即ち、司馬休之の家の場合、河内温はずっと前の祖先の居住地、その後南遷と共に丹陵の地に本貫をうつしたものと考えて誤りなからう。

(2) 魏書(61) 申纂伝に、

「本魏郡人申鍾曾孫也。皇始初、太祖平中山。纂宗室南奔。家于濟陰。」

とみえるのは、魏郡申氏が南遷して、濟陰に生活の地をうつし、ここを新しい本貫(新望)としていたことを示すものであろう。例えば同伝畢衆敬伝に、

「(衆敬)弟衆密為(薛)安都長史。亦遣人密至濟陰。掘纂父墓。以相報答。」

とあるのは、申纂の父の墓が濟陰にあったことを証するわけで、それはこの地が申氏一家の居住地であり、本貫(新望)であったことを示すものといえる。

(3) 魏書(70) 傅豎眼伝によると、

「傅豎眼、本清河人。祖父融南徙渡河。家于盤陽。為鄉閭所重。」

とみえて、元来は清河傅氏と呼ばれた一族が、今や盤陽の豪門となっていたことを示している。

(4) 次に、北齊書(42) 崔劼伝をみるに、

北朝における郡望の性格(上)

「本清河人。曾祖曠南度河。居青州之東。時宋氏於河南立冀州、置郡縣。即為東清河郡人。南縣分易。更為南平原貝丘人也。世為三齊大族。」

という。これによると、所謂清河崔氏という名門に属した崔劼一門が、曾祖曠の時南遷して青州にうつり、南朝宋に属して東清河郡、更に南平原郡の人となったが、「世為三齊大族」といわれているのであるから、この地に根をおろして此の地を本貫として定めていたことは間違いないまい（魏書（71）李（元護伝参照））。

(5) 次に隋書（66）房彦謙伝をみるに、

「本清河人也。七世祖謠仕燕太尉掾。随慕容氏。遷于齊。子孫因家焉。世為燕姓。」

というが、これも元來清河郡望の房氏が、今や齊州の房氏に変わっていることを示しているといえよう。そのことは、金石萃編（43）房彦謙碑に、

「公諱彦謙字孝冲、清河人也。……安措於本鄉齊州亭山縣趙山之陽。」

とみえるように、形式的に清河人と称するように見えながら、実は現在では「本郷齊州」にこそ本貫をつけていることを明言しているからである。少なくとも、彦謙の属する房氏一門は、「本清河人」にすぎないので、今は「齊州人」であるといふべきである。

#### b 「其先」の場合

「本某地人」という表現が魏書には極めて多いのに、実は「其先某地人」という表現は珍らしいくらいに少ない。又、周書には「本某地人」という表現は殆どみえず、専ら「其先某地人」と表現しているようである。これらには、特に理由があるわけではなく、恐らくは編者の記述方法の相違によるものであろう。

いま魏書を検索すると、（81）慕容伝、山偉伝、劉仁之伝、（93）侯剛伝に、

「河南洛陽人也。其先代人。」

とみえる。これらは勿論鮮卑族に属する人々で、孝文帝に従つて洛陽に遷り、河南洛陽の人となつた故にこのように記されているのであらう。漢民族についての、このような表現は見られない。

ついで北斉書をみるも、こういう表現はあまり多くはない。例えば北斉書(25)徐遠伝によるに、

「廣寧石門人也。其先、出自廣平。」

とみえ、同書(40)唐邕伝に、

「太原晉陽人。其先、自晉昌徙焉。」

とみえ、同書(47)宋遊道伝に、

「廣平人也。其先、自燉煌徙焉。」

とみえるくらいのものである。これらは、既に現住所、現本貫地を伝頭に記し、わずかに郡望を追記するという形をとっている。

ところが、周書となると全く記述法が異なってくる。いまその二、三の例を引用する。

(1) 周書(25)李賢伝によると、

「其先、隴西成紀人也。……祖斌襲領父兵。鎮於高平。因家焉。」

とみえ、周書(27)蔡祐伝には、

「其先、陳留圉人也。曾祖紹為夏州鎮將。徙居高平。因家焉。」

とみえる。これらの人は夫々隴西李氏、陳留蔡氏という豪門の一族であったが、この当時郡望(旧望)の地をはなれて移住した高平の地に本貫(新望)をうつしてその地の人となつたといえよう。それは、次のような例によって確かめられるの

北朝における郡望の性格(上)

入

である。

(2) 周書(33) 趙文表伝によるに、

「趙文表、其先、天水西人也。後徙居南鄭。累世為二千石。」

という。元來天水趙氏に属したこの一家は、後に南鄭に根拠地をかまえ、累世二千石となる名門となったというのであるから、勿論、今や完全に南鄭の人となっていたに違いない。

(3) 周書(44) 席固伝によれば、

「席固……其先、安定人也。高祖衛、因後秦之乱。寓居於襄陽。仕晋為建威將軍。遂為襄陽著姓。」

という。席固の祖先は安定から襄陽にうつり、遂に襄陽の著姓となったというのであるから、席氏一家は襄陽土著の名門として、この地を本貫とし、生活の根拠地としていたことは間違いない(拙著「門閥社会史」の「六朝門閥の社会的・政治的考察」参照)。

c 「自云、某地人」の場合

魏書(38) 王慧龍伝によると、

「自云、太原晋陽人。司馬德宗尚書僕射愉之孫、散騎侍郎緝之子也。」

とある。ところが、魏書(58) 楊播伝に、

「自云、恒農華陰人也。」

とあるものについて、北齊書(37) 魏収伝には、

「楊愔家伝本無。……又先云、弘農華陰人。乃改、自云弘農。以配王慧龍自云太原人。」

といている。これによれば、楊愔(楊播の弟津の子)の家、即ち楊播一門には、元來家伝なるものはなく、何処の楊氏かその出自も明らかでないで、「弘農華陰人」とあったものを、「自云弘農華陰人」に改めた。それは正に王慧龍の場合

と同様である、ということのようである。

すると、王慧龍の場合も、家伝、氏譜の如き、その祖先を明らかにする資料がなかったのであろうか。しかし、王慧龍伝には、その祖愉、父緝を明記している。しかもこの二人は太原王氏に属し、王湛の子孫であることは明らかである（拙著「訂魏晉百官世系表」参照）。従って、慧龍が愉、緝の孫であり、子であることが事実であるならば、太原王氏に属することは明らかであるのに、何故に、「自云」と記されているのであろうか。

ところが、これから述べるように、王慧龍は自らを南人と称し、北朝の人々もまた彼を南人と考えている。従って、慧龍の出自についてはあまりよくわかっていなかった、と見るべきであって、そのことは、「自云」は単に太原晋陽人のみにかかるのではなくて、最後の「……緝之子也。」というところまでかかるものと考うべきなのであろう。すると、この場合も楊播一家の場合と同様に、身許不明ということで「自云」とされたとしか考えられない。

さて、王慧龍の出自についてみるに、魏書の彼の伝に、

「太宗崩。世祖初即位。咸謂南人不宜委以師旅之任。遂停前授。」

とあるが、これは彼が南方から北帰して北魏太宗に仕え洛城鎮將に任ぜられた直後のことである。これによれば、彼は北魏の人々から南人とみられ、彼等北人——この場合は華北の漢民族、鮮卑族を含めて——とは区別さるべきだと考えられていたといえる。

しかも王慧龍自らも、同伝に、

「臨没謂功曹鄭暉曰。吾羈旅南人。恩非旧結。蒙聖朝殊特之慈。得在疆場効命。」

といっているように、江北という旅先にいる南人と考えていたのである。即ち、慧龍伝にみえるところでは、彼は自らを「太原王氏」という江北における有力門閥の出身であるとする意識よりも、寧ろ南方からやってきた南朝人であるという

意識こそ強かったと見られるのである。

こう考えてくると、「自云」というのは、史書の編者が歴史的事実として彼の太原王氏に属するとは認め難いという点と共に、慧龍自身の中にも、そのような郡望に執着する気持がなかったであろうという点と、この両者を含んでいたと解してよいのではあるまいか。

勿論、「自云」というのには、王慧龍の場合と全く異なつて、その出自はいまいであるのに、郡望にとらわれて、名門に名をかりた場合もあった。

例えば魏書(93)王仲興伝をみると、

「王仲興、趙郡南樂人也。父天德起自細微。……仲興世居趙郡。自以寒微、云旧出京兆霸城。故為雍州大中正。」

とあり、或はまた、魏書(93)王叡伝によると、

「王叡……自云、太原晉陽人也。六世祖橫、張軌參軍。晉乱。子孫因居於武威姑臧。……叡既貴。乃言家本太原晉陽。遂移屬焉。故其兄弟封爵、多以并州郡縣。」

とみえる。これらは何れも大した家ではなかったが、官僚として立身するにつれてその出自を名門であるかの如く詐つたことを示すものである。このような例は他にもみえるが、これらは一応郡望に執着し、むしろ郡望を尊重するものといえないことはない。しかし、このような例は自らの郡望を自ら否定しているわけで、必ずしも郡望が社会的に重視されていたことを示すとは、いい切れないのではなからうか。何故なら、史書の編者はこれらの人々の態度を「自云」と記すことによって批判しているわけであるし、又そのように簡単に他の郡望に仮托する風潮が存したことは、反つてそれら郡望の社会的権威がなくなりつつあったことを示すと思われるからである。即ち、王慧龍以下の諸例を通じていえることは、北朝においても、郡望の社会的地位は低下しつつあったということであろう。

以上のように、正史にみえる出身地表現の方法には色々の形式があつたのであるが、これを南朝史書の表現と比較すると、北朝史書の方がかなり郡望否定を明確に示しているようである（拙稿、前述「郡望と土断」参照）。

南朝では、江北から移住した家々では、いうまでもなく郡望とは全く異なつた土地におちつき、その地の人となつてゐるにもかかわらず、それをあからさまに表現しないで、形式的にはあくまで郡望を列伝の初めに掲げ、本文中において、「世居某地」という如き表現をとつて、間接的に郡望否定を記すという形をとつてゐる（前述「郡望と土断」「東晋における南北人对立問題」、拙稿「土断と白籍」）。（史学雑誌79—8—等参照）。

これに対して、北朝史書では割合にはつきりと郡望否定の形を記していること、上述した通りである。すると、同じく郡望否定の傾向は何われながらも、北朝史書の方が断定的であるといえる。その理由について考えてみるに、西晋末江北から江南に遷つた有力官僚達は、司馬睿の子孫を中心にして新しい江南門閥社会をつくり上げ、南朝独自の封鎖的身分社会を形成してゐたのに対し、江北では、多くの北方民族の北支移住という状態の下で、江北に居残つた漢民族においては、官達は実力次第という政治情勢となり、郡望という漢民族社会の格付けは、政治的にも社会的にも大した意味をもたなくなりつつあつたためではなからうか。何れにしても、北朝は南朝以上に郡望否定の傾向は強く且つ断定的であつたようである。